

I 柏尾と柏尾町内会編

地名の由来は各地によっていろいろですが、主に歴史的な由来、地形的な由来、行政的な由来等があげられます。

私たちの住むこの「柏尾」という地名については、江戸時代の記録に「上柏尾村」「下柏尾村」という記載があります。また、新編相模風土記に「古（いにしえ）櫛尾と記せし」という標記が見られます。字は違いますが、音は同じ「かしお」です。

「柏尾」の場合は、地形からつけられた地名と言えます。つまり、「かしお」という音が優先され、字は後からあてられたので漢字が何種類かあるのです。では、「かしお」というのは、どんな地形をあらわしているのでしょうか。柏尾町に住んでいる方ならすでにおわかりでしょうが、山稜の傾斜地をあらわしているそうです。

さらに、ここからは一説ですが、「かし・お」と分けてみたときに、「かし」は「傾ぐ（かしぐ）」「傾げる（かしげる）」など傾いている様子につながり、「お」は「尾」で、山の裾野をあらわしているのではないかと考えられます。

いずれにしても、平地がほとんど無く、地名通り山の裾の傾斜地を開発し、発展してきたことがまさしく柏尾町の歴史といえるのではないのでしょうか。

〈「横浜の町名」（横浜市市民局）「神奈川県の名地名」（平凡社）参考〉

当編では、江戸時代から明治、大正を経て昭和、平成に至る柏尾の沿革と、地域活動の流れ、中でも柏尾町内会誕生の経過、その後の各種行事の発祥の起源について調査した結果を紹介いたします。

更に日本で初めてハム生産に成功した「鎌倉ハム」の歴史や、地域の史蹟・旧跡についても触れながら、大正末から昭和初期の柏尾の生活の様子を色々な資料を基に紹介させていただきます。

そして後半では、柏尾に生まれ、若い時代に舞岡町に移り、戸塚区連合町内会長を務められた益田茂平氏の手記を掲載させていただきました。

この手記は4つの投稿に分かれ、当時の生活と職業、祭礼の様子等が非常に詳しく述べられていますが、特に大正12年の関東大震災の記述は、昨年東日本大震災を経験した私たちに自然の猛威と当時の柏尾の人々の様子をまざまざと蘇らせる迫力のある内容となっています。

この記念誌全体に渡ることですが、個々の記録、証言、紹介文は多くの方々の手で書かれており、編纂委員会での校正・修正は最小限にとどめましたので表現方法が多様となっている点をご了解いただきたいと思います。

柏尾には昔から、地区ごとに「字名」がついていました。番地で住所を表記する以前はこれらの字名で場所を特定していたようです。今でも古い土地の登記簿にはこれらの字名が残っています。どのような理由で付いたのか不明なものも多いようですが、多くの場合その場所の地形からきており、代表的なものがいくつかの「谷戸」或いは「谷」(やと)と言われるもので、丘陵地の中で一段低くなった谷あいの土地を一般的に呼んでいます。その他には、代表的な建物や木や池などが近くにある場合、それらの名を冠する場合があります。例えば成正寺の近くには「寺ノ下」や「寺ノ上」、王子神社の近くには「宮ノ下」や「宮ノ谷」、そして以前は「薬師堂」があったのでしょう「薬師下」などがあり、柏尾小学校の下の大池の辺りには「池ノ谷」「池ノ下」などがあります。こうした当時の「下柏尾村」の字名一覧を表記したものが次頁の資料です。

この資料は、以前から地域の歴史を研究されている舞岡第一町内会会長福田俊光氏が昭和4年10月に発行された「鎌倉郡川上村 地番反別入図」から読み取られた「下柏尾の字名」を一部校正して掲載させていただいたものです。

1 地図から見た柏尾の移り変わり

(1) 柏尾の字の紹介

鎌倉郡川上村全図

北ノ方四万七千八百七十八



< 鎌倉郡川上村全図から抜粋 >

「下柏尾村」の字名

No.	字	ヨミ	番地	No.	字	ヨミ	番地
1	吉田	ヨシダ	1~28	15	市場谷	イチバヤト	729~805
2	古川	フルカワ	29~59	16	殿ガ谷	トノガヤト	806~868, 1473
3	土婦	トブ	60~178	17	梶路免	カシロメシ	869~938, 1474
4	下	シモ	179~187, 261, 430~432 1470, 1012~1026, 1034~1036	18	両谷	リョウヤト	1130~1168
5	中土婦	ナカドブ	188~249	19	薬師下	ヤクシシタ	1167~1216
6	広町	ヒロマチ	250~260, 262~323, 429	20	寺ノ上	テラノウエ	1217~1234
7	大善寺前	ダイゼンジマエ	324~428	21	八ガ谷	ハチガヤト	1235~1275, 1285
8	尾崎台	オザキダイ	433~452, 466~467, 1005~1006, 1088~1011	22	鍵谷	カギヤト	1276~1284, 1286~1314 1332~1346
9	尾崎下	オザキシタ	453~465, 468~516	23	大丸	オオマル	1315~1331
10	宮ノ下	ミヤノシタ	517~541, 545~591, 602~728	24	池ノ谷	イケノヤト	1347~1381, 1457~1467
11	宮ノ谷	ミヤノヤト	542~544, 592~601, 939~1001	25	池ノ下	イケノシタ	1382~1409
12	並木	ナミキ	1002~1004, 1007, 1037~1091	26	柏尾向	カシオムキ	1410~1420
13	孫之台	マゴノダイ	1027~1033, 1116~1129	27	蛇久保	ヘビクボ	1421~1456
14	寺ノ下	テラノシタ	1092~1115	28	留郷	トメゴウ	1468~1469

(2) 地図・航空写真で見る柏尾の100年



<明治 15 年 (1882) 古地図>



<昭和 19 年 10 月 14 日 (1944) 航空写真>



<昭和 52 年 12 月 22 日 (1977) 航空写真>



<平成 19 年 4 月 26 日 (2007) 航空写真>

2 「柏尾町内会」の発足

柏尾町内会がいつ正式に発足したのかを示す明確な資料はまだ見つかっていない。しかし、いくつかの資料にそれを示唆する記述が見られる。

戸塚区役所が毎年発行する「戸塚区地域活動ハンドブック」からの抜粋では、『横浜市における町内会の起源は、市制が施行された翌年の明治23年(1890)につくられた「衛生組合」に求められるといわれています。この衛生組合を組織した目的は、第一に横浜が開港以前は一寒村にすぎず、他の地域にあるような旧来の隣保組織を持っていなかったこと、第二に横浜が開港地として貿易や居留外国人との関係で、伝染病の危険にさらされる機会が多かったためであろうと思われます。

大正12年(1923)の関東大震災によって、横浜市は広い地域にわたって混乱状態に陥りましたが、全市的な機能を持っていない衛生組合は十分な活動を行うことができず、混乱の中から生まれた「自警団」が難民の救済や町の治安に大きな力を発揮しました。世の中が平穏に戻るにつれて「自警団」は解散し、公的組合である「衛生組合」に代わって、「青年会」や「町内会」などが任意団体として市内各地に生まれ、自治活動を行うようになってきました。

昭和15年(1940)に内務省(現在の総務省)は「部落会町内会等整備要綱」を訓令し、「町内会」を上意下達 of 行政組織として全国的に整備し、「町内会」の下に10戸前後の「隣組」をつくらせました。』とある。

また戸塚区役所が平成元年(1989)に発行した「戸塚区史 区制50周年記念」には昭和14年(1939)に、「鎌倉郡戸塚町・瀬谷村・川上村・中川村・豊田村・本郷村・中和田村・大正村1町7か村の横浜市への編入決議。…戸塚区誕生」との記述が見られる。

この地域はそれ以前は「鎌倉郡川上村下柏尾」と呼ばれていたが、昭和14年4月1日「横浜市」に編入された際「横浜市戸塚区柏尾町」が誕生したことを示している。(当時の世帯数93、人口561人)

更に昭和16年(1941)に「横浜市町内会結成記念大会開催。戸塚区の結成総数は61町内会」とあることから、少なくともこの時点で「柏尾町内会」が結成されていたと考えられる。つまり今から約70年前に「柏尾町内会」は結成されたものと思われる。

3 「町内会」結成以前の組織

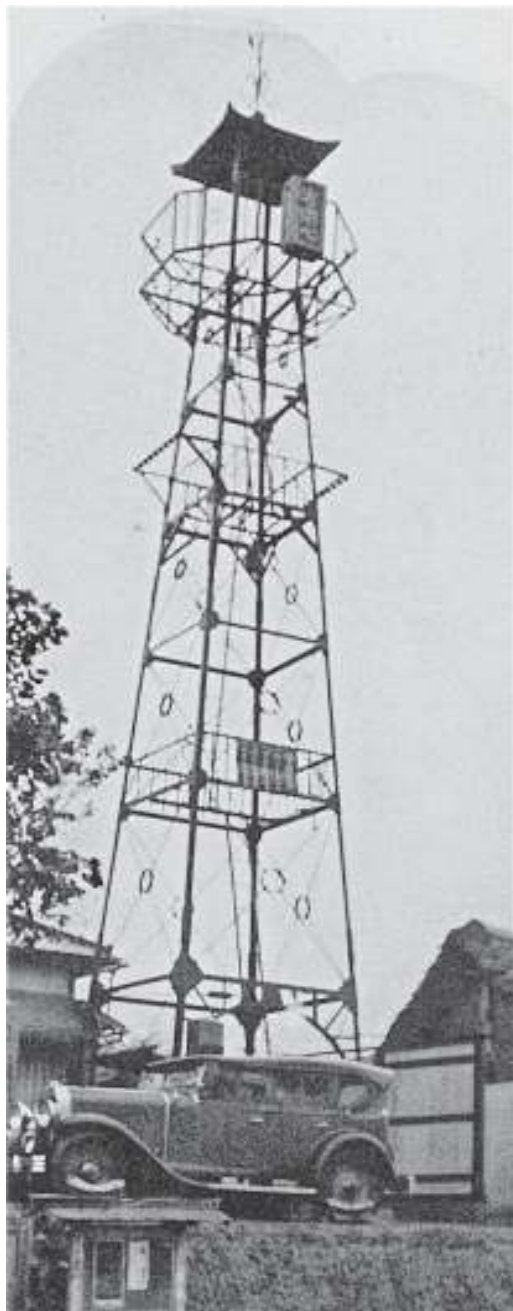
大正12年(1923)の関東大震災では地震による家屋の倒壊とともに、火災による焼死者が膨大な数に上ったことが伝えられている。こうした事態に対処するため、その後各地に「消防組」(現在の消防団の前身)が組織された。この間の事情を詳しく伝える資料に昭和7年5月(1932)発行の「川上消防組

表彰記念写真帖」がある。(齋藤孝次氏所蔵) この資料によると、大正15年10月15日(1926)に県令第133号で「公設消防組」の設置が認可されたとあり、同月28日に齋藤萬治氏が「組頭」を任命されている。

この齋藤萬治氏は、別項で触れる鎌倉ハムの創始者の一人である齋藤満平氏の孫に当たる方で、後述するように柏尾町内会第3代会長にも就任している。また横浜市の市議会議員(昭和17年6月～昭和22年4月)も務め、更には地元の旧川上小学校のPTA会長を昭和22年から34年まで実に12年間も

務めており、まさに地元の有力者であった。尚、齋藤萬治氏の表記は資料によって「萬治」「万治」「万次」に分かれているが、今回は萬治氏が組頭として編集したこの写真帖の表記「萬治」に統一させていただいた。この写真帖には理事として板島源蔵氏(柏尾町内会第2代会長)の名前もあり、「消防組」は地域の自治を実質的に代表する組織であった。

この川上消防組の組織は地区別(上柏尾、下柏尾、舞岡、平戸、品濃、前山田(前田)、後山田(秋葉))に第1部から第7部まで構成され、下柏尾は第2部に属していた。旧川上連合町内会の区域をほぼカバーしていた大きな組織であった。当時の下柏尾の戸数は75戸、棟数210、人口は529名とある(平均7人家族)。現在の「柏尾町」の区域には、柏尾町内会860世帯(加入数)、柏尾富士見台自治会458世帯、柏陽台自治会475世帯、優彩の街自



<昭和5年に建てられた火の見やぐらと初代消防自動車>



<2代目の消防自動車>

治会 1 5 3 世帯の計 2, 2 4 6 世帯なので 8 0 年間で戸数が約 3 0 倍になった勘定である。

消防事務所は「川上村下柏尾」にあり、鉄骨の火の見櫓 1 基があったと記されているので、これが不動坂にあった柏尾公民館前の「旧消防小屋」と火の見櫓であったことが分かる。

この消防組の組織が基礎となり、昭和 1 4 年(1939)の柏尾町誕生の際、地域の自治を担当する組織として柏尾町内会が、また防災・防火の組織として「消防団」がそれぞれ分離独立したものと思われる。

4 歴代柏尾町内会長

柏尾公民館に残されていた歴代会長の写真を基にすると、現在までに 9 名の町内会長が存在していたことになる。4 代目の齋藤武次氏からは就任期間も判明しているが、3 代目以前の会長については就任期間が不明である。

毎年区役所へ「町内会役員現況届」を提出することが義務付けられているので、区には記録があるものと思い問い合わせたが、区の記録では第 3 代の齋藤萬治氏が「初代」とされており、また就任期間も不明とのことで今後の調査を待つことにしたい。

9 名の町内会長のうち、7 名までが「齋藤」姓であり、更に 3 組の親子が就任していることに柏尾の土地柄が思われる次第である。



〈初代 齋藤茂吉氏〉



〈二代 板寫源蔵氏〉



〈三代 齋藤萬治氏〉



〈四代 齋藤武次氏〉
(昭和 44. 4-昭和 48. 3)



〈五代 齋藤福太郎氏〉
(昭和 48. 4-昭和 55. 3)



〈六代 益田庄作氏〉
(昭和 55. 4-平成 4. 3)



〈七代 齋藤忠義氏〉
(平成 4. 4-平成 10. 3)



〈八代 齋藤宣雄氏〉
(平成 10. 4-平成 22. 3)

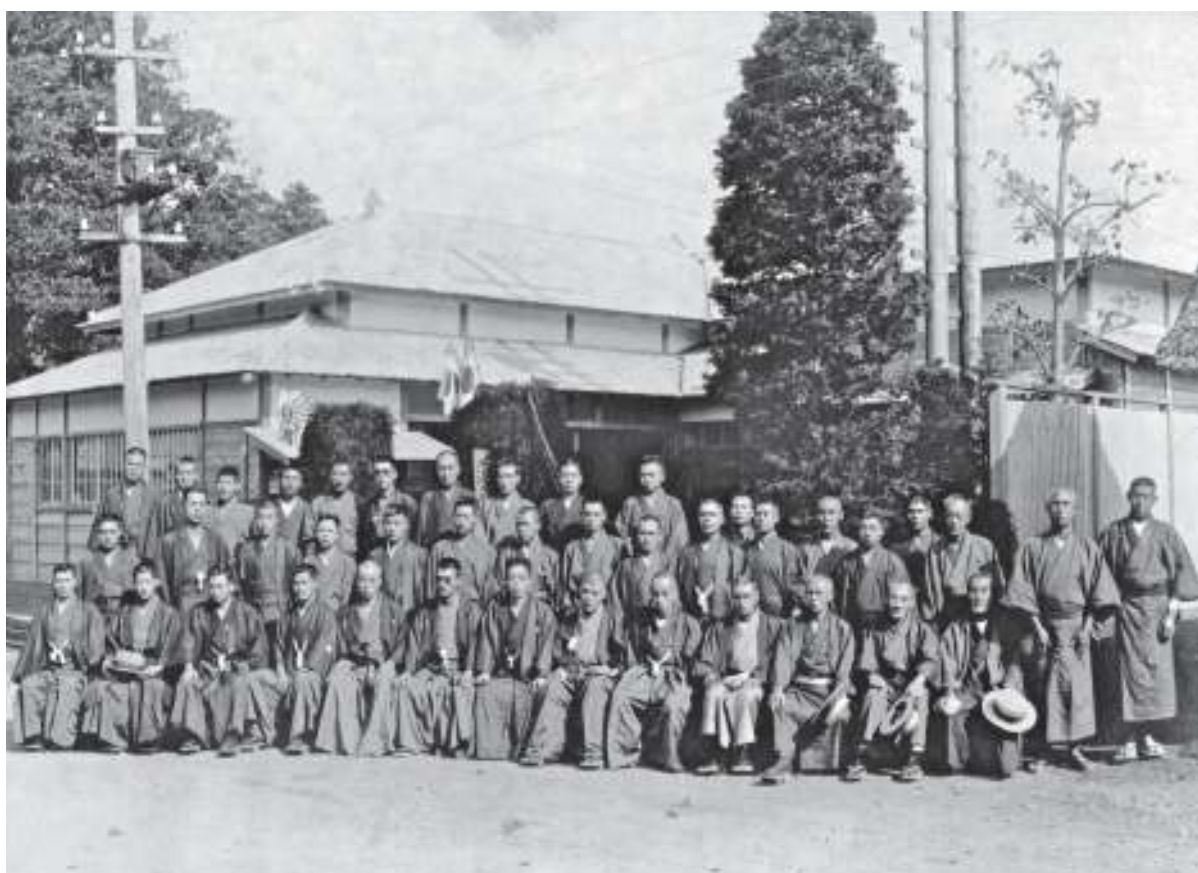
5 柏尾公民館の歴史

ここで柏尾公民館の歴史についても触れておきたい。大正3年(1914)柏尾に生まれ、その後舞岡に移り、永年戸塚区の区連会の会長を勤められた益田茂平氏(現在97歳!)が今回「100年史」のためにいくつかの貴重な手記を書き綴ってくれている。その中では、当時の王子神社の祭礼の様子や大正12年の関東大震災の悲惨な状況が克明に語られている。そして、今まで記録がはっきりしなかった柏尾公民館が関東大震災当時建設中で、震災のため落成が遅れてしまったものの、地元の住民の協力で翌年の春、つまり大正13

年3月(1924)に目出度く落成に漕ぎ着けたという証言が見られる。私たちは平成22年(2010)柏尾町内会館を地域住民の力で建設し、今年(2011)は関東大震災に次ぐ歴史的規模の東日本大震災に遭遇した訳だが、奇しくも86年前にもこの地で同じような事象が発生していたことになる。

今回の調査で柏尾公民館の平成17年度(2005)家屋評価証明書が見つかったが、それに拠ると「当初建築年 大正12年」と明記されており、前述の茂平氏の手記とも合致していることが確認された。

大正13年に行われた柏尾公民館落成式の記念写真が残されている。公民館をバックに41名の方々の正装した姿が写されているが、この当時は火の見やぐらがまだ木製の柱で、昭和5年(1930)に鉄骨のやぐらに代わる前のものであることも分かる。



<柏尾公民館落成式(大正13年3月): 森千枝子氏所蔵>

この公民館の土地(柏尾町1006番地、71坪)は個人の地主から借用したもので、昭和11年1月1日(1936)付で当時の地主の亀井朝吉氏と川上青年団下柏尾支部長齋藤熊蔵氏との土地賃貸借契約書が残されている。因みに当時の賃借料は1ヶ月坪当たり5銭、年間で42円60銭(現在の価値で約30万円)となっている。



＜ 亀井氏との土地賃貸借契約書 ＞

柏尾公民館の落成式から87年、本年1月(2011)に新会館の建設を祝って町内会役員と会員が一堂に会して賀詞交歓会を行った。その際柏尾町内会館をバックに撮った記念写真が掲載のものである。この写真には44名の正装した会員が写っているが、次の87年後にこの写真が残り、そしてこの柏尾町内会が更に大きく発展することを願うものである。



＜ 柏尾町内会館を背に賀詞交歓会記念撮影（平成23年） ＞

6 柏尾青年団(会)について

戦前から地域の青年層を集めて「青年団(会)」を結成し、スポーツ活動や各種事業に当たらせていたことは良く知られているが、この柏尾でいつの時代から青年団が組織されたのか、記録が残されていない。しかし前述の公民館土地の賃貸借契約書にもあるように既に昭和11年(1936)には「川上青年団」が結成され「下柏尾支部」が存在したことが判明している。この時期の青年団を仮に「第1期青年団」と呼ぶことにする。

この時代の青年団員の多くは次第に強まる軍国主義の時代背景の下に、「川上村立青年訓練所」(旧川上小学校)で軍事教練を受けていたことがいくつかの写真に残されている。



〈川上村立青年訓練所での訓練風景：齋藤孝次氏所蔵〉

またこの「川上村青年会下柏尾支部」の団旗が現在も柏尾町内会館に保存されている。いつの時代に作られたのかは不明だが、川上村の名があることから、少なくとも昭和14年(1939)以前、つまり72年以上前に作られた貴重なものである。

「KS」の意味は、「川上村下柏尾」または「川上村青年会」の頭文字「K・S」とも取れるし、「下柏尾」の意味の「S・K」とも読



〈川上村青年会下柏尾支部団旗〉

める。単純に「かしお」の意味で「K・S」としたのかも知れない。まさか「柏尾の齋藤」の「K・S」ではないだろうが、KとSが絡み合っているこの文字にも当時の青年団の「柏尾」への熱い思いが窺える。

終戦とともに新しい時代の青年団が誕生した（第2期青年会）。昭和21年11月3日（1946）に「川上連合青年団」の発会式が川上国民学校（旧川上小学校）で行われ、その際の記念写真が見つかっている。この時代の青年会は、軍事教練ではなくスポーツ大会やレクリエーションを中心に積極的に活動を展開しており、昭和24年（1949）に行われた「第4回青年体育大会」で柏尾青年団チームが優勝した際には、K Sの頭文字入り団旗（前掲）を中心に自信満々の団員の姿が写されている。



〈第4回青年体育大会優勝記念（昭和24年）：齋藤君江氏所蔵〉

第3期の青年会は、昭和52年（1977）に町内から約100名の青年を集めて組織され、天本武氏が会長に就任している。この時代には「柏尾体育大会」や餅つき大会、元旦マラソン、ソフトボール大会、富士登山等の各種行事が行われ、多くが現在にまで引き継がれている。

現在の第4期青年会は平成18年4月30日（2006）に発足し、江橋賢治会長（会員28名）を中心に餅つき大会やインディアカ大会で引き続き活躍している。第1期の設立時期は不明だが、その後の青年会の発足の間隔が約30年毎というのも一つの意味があるように思える。

7 柏尾町の年間行事について(連合町内会行事も含む)

柏尾町で行っている主な年間行事は以下のとおりである（平成 22 年度分）

月	日	事業内容	参加人員	開催場所等
4	25	柏尾町内会定期総会	977	柏尾町内会館（委任状を含む人数）
5	5	柏尾連合町内会総会	40	柏陽台自治会集会所
	10	柏尾地区さわやかウォーク	55	大山道の散策（第 2 回）
6	13	地域ケアプラザ 10 周年祭	1000	舞岡柏尾地域ケアプラザ
	27	第 10 回大人のインディアカ大会	250	柏尾小学校体育館 （40 チーム参加）
7	11	柏尾地区少年少女スポーツ大会	200	柏尾小学校体育館（柏尾 A 優勝） （14 チーム参加）
	27	追分不動尊祭礼	30	追分不動尊
8	7	柏尾町内会納涼盆踊り大会	延べ 1270	柏尾小学校校庭
	29	柏尾地区連合町内会拠点防災訓練	1000	柏尾小学校 （地域・学校・区の合同訓練）
9	19	柏尾町内会敬老の日 祝賀会	120	ポーラ化成工業 研究所 ホール
10	3	柏尾地区連合町内会 第 21 回秋季レクリエーション大会	1000	柏尾小学校校庭／柏尾町 2 連覇
11	7	柏尾地区連合町内会 創立 20 周年祭	1000	柏尾小学校
12	5	柏尾町餅つき大会／忘年会	300	柏尾公民館
	12	柏尾地区もちつき大会	700	柏尾小学校駐車場
	25 31	防災部・消防団 年末年始火災特別警戒		柏尾町全域
	25	子ども会 火の用心夜回り実施	80	柏尾町全域
1	1	元旦マラソン大会	220	不動坂→柏尾小学校
	9	柏尾町内会賀詞交歓会	44	柏尾町内会館
2	11	初午稲荷講開催	25	益田家稲荷 → 柏尾公民館
	26	柏尾地区ドッジボール大会	160	柏尾小学校体育館(14 チーム参加)

(1) 納涼盆踊り大会

毎年8月初旬に行われるがいつの時期から行われるようになったのか記録が明らかではない。しかし現在に近い形で行われるようになったのは、昭和52年(1977)に第3期青年会が発足して以降の事である。当初は王子神社境内で行っており開催期日も2日間であったが、会場が手狭となったこともありその後町内会有志所有の空き地を使っての開催となり、昭和62年(1987)頃から柏尾小学校の校庭をお借りして開催するようになったものである。



〈王子神社境内で行われた盆踊り大会〉

(2) 王子神社祭礼

王子神社祭礼については、大正から昭和初期の様子について益田茂平氏の手記に詳述されているが、昭和50年代に王子神社氏子と町内会が協力して祭礼を盛り上げようとした時期があった。この祭礼でも青年会が中心となり、9月13日の祭礼当日には自分たちで作った樽神輿2基と、齋藤板金殿から奉納していただいた1基とを併せて、柏屋商店近くの神酒所を出発地点とし、町内全域をA、B、C3コースに分けて練り歩き、最終地点の王子神社で参加者に梨やジュースを配っている。また神輿を担げない幼児のために「山車」も準備し、同様に町内主要部を巡回し王子神社に参っている。



〈王子神社の祭礼〉

更に祭りの前日には「前夜祭」として王子神社境内で金魚釣り・ヨーヨー釣り(富士見台自治会)、綿菓子(柏陽台自治会)、かき氷・ジュース・ビール(柏尾町内会)の販売を行い、夜にはチビッコ・カラオケ大会や映画大会まで行っている。

当時こうした行事を行うことができたのは、王子神社氏子代表と町内会役員

を兼任されている方が多かったためと思われ、町内会総会后、王子神社の収支決算報告を行っていた時代でもあった。

しかしこうした時代も長くは続かず、氏子代表と町内会役員が分かれて選出されるようになった平成に入ると王子神社祭礼は氏子組織のみの開催となり、樽神輿2基も神社境内に放置されて朽ち果て、また永らく柏尾公民館に保存されていた齋藤板金殿奉納の1基も柏尾公民館が解体された平成22年(2010)に廃棄せざるを得なくなった。

比較するのが妥当かどうかは是非の分かれるところであるが、同じ旧川上地区の平戸町にある白旗神社の祭礼は近年非常に盛んで、昨年の状況を見ても夜店だけで10数軒が軒を並べ、カラオケ大会や各種催し物が町内会総出で行われているのを見るにつけ、いつかこの王子神社の祭礼を再び柏尾の地で盛んにしたいと思う次第である。

(3)初午稲荷講

京都の伏見稲荷神社を始め全国に多くの稲荷社があり、柏尾町内にも王子神社境内や個人宅でも稲荷社が祀られている。この稲荷信仰は平安初期から熱烈な信仰があったといわれているが、柏尾町のような農村部では農業の神様としてその年の豊作を願い、また家内安全を祈願して毎年立春後の最初の午の日(初午)に稲荷講に加入している人(講中)が集まって祭りを行っていたようである。近年は2月11日の建国記念の日に柏尾公民館に講中以外の方々も集まり、お赤飯や油揚げ、いわしの目刺などが供えられた祭壇の前で講長が祝詞を奉じ、その後参加者が祭壇に拝礼し和やかに歓談している。



〈柏尾公民館での初午稲荷講祭壇〉
(平成20年)

元来は講中全員が稲荷社へ詣でていたようだが、近年は代表数人が稲荷社(以前は王子神社境内の稲荷社、平成15年からは益田庄太郎氏宅の稲荷社)へ詣で、その後公民館へ戻って祭礼を行うようになっている。いつ頃から柏尾でこうした稲荷講が発足したのか、また現在講中が何人残っておられるのかは不明である。柏尾公民館が解体された平成23年(2011)以降は柏尾町内会館で有志による祭礼を継続している。

(4) どんど焼き

どんど焼きは、本来三つ辻(Y字路)で行われるものの様で、柏尾でも以前はワンマン道路入口あたりや市場谷等の集落毎に行われていた。近年では柏尾第五公園で、毎年1月14日に正月のお飾りや門松、古いお札などを近所の人を持ちより、焚き上げていた。その日は、上新粉で白、緑、ピンク色などの大きな団子を作り(まゆだま)三つ又に分かれたナラや



〈柏尾第五公園でのどんど焼き〉

クヌギの木の長い枝にさし、焚き上げの炎で団子を焼いていた。焼いている間は、持ち寄った酒、菓子で談笑の場であった。焼けた団子は、家に持ち帰り家族で分けて食べ、一年の無病息災を祈った。

どんど焼きに行かれなかった人にも団子や菓子を分けてあげ喜ばれた。子供達は学校が始業しているため参加する機会になかなか恵まれず、知ることが少なく継承されていない事は残念である。このどんど焼きも平成20年頃までは行われていたが、最近では行われていない。現在は王子神社で左義長あるいは、さいと焼きとして、1月中旬に行われている様である。

8 柏尾の史跡・旧跡

(1) 御祭神護良親王命と王子神社 【寄稿】

「柏尾の100年史」編纂おめでとう御座います。

当柏尾に鎮座いたします王子神社は後醍醐天皇第一皇子護良親王を御祭神と奉斎する神社であります。

護良親王は父君の後醍醐天皇と力を合わせ建武中興の大業を成就されました。しかし足利尊氏との対立で囚われの身となり9ヶ月もの間、鎌倉市二階堂に幽閉の御身となり後に尊氏の弟、直義の命に従った淵辺義博の虐刃に最期を遂げられました。

親王の御首を側近が当柏尾の地までお運びし、井戸で洗い清め現在の王子神社本殿の地に葬ったと云われ御首を洗い清めた井戸は四本の杭で囲み、以後四ツ杭首洗い井戸といわれ現存して居ります。



〈王子神社境内〉

昭和10年(1935)に建武中興600年記念祭が斎行され狛犬が奉獻され昭和60年(1985)の建武中興650年記念祭では手水舎が奉獻されております。また遡って江戸時代の嘉永2年(1849)には石燈籠が奉獻されており、先達の崇敬の思いがしのべれます。

当神社は年間行事として1月元旦に歳旦祭、1月中旬に左義長(どんどやき)8月15日に戦没者慰霊祭、9月13日に王子神社例大祭、11月15日には新嘗祭、七五三祝等の祭事を執り行っております。尚、末社として豊受大神宮、子の神様、伏見稲荷、弁財天の末社四社が境内に合祀されております。

(王子神社宮司 石井直樹)

今回王子神社の由来については現王子神社宮司 石井直樹氏に寄稿を依頼し、前項で紹介させていただいたが、編纂委員会の天本武委員が「護良親王殺害」に至る歴史的背景を研究し書き下ろしているのを併せて紹介させていただくこととした。

<王子神社と護良親王(もりながしんのう)>

鎌倉政権は北条高時(ほうじょうたかとき)が権力を握っていた時代である。高時は、政治に不熱心で遊興にふけり仕事は部下に任せきりだった。そのために幕府のモラルは低下し、その権威と実力は失われていった。一方後醍醐天皇は勤勉家で、学問的確信から「君主の徳を持ってする親政が万民を救う」と言う信念から、密かに幕府打倒を画策していた。

後醍醐天皇の皇子の護良親王も父君に劣らぬ倒幕論者であり、豪族の楠木正成や北条家に恨みを持つ足利尊氏や新田義貞等と反幕府軍を結成し、各地で幕府軍との間に激戦を繰り広げ内乱状態を作り、ついに鎌倉に突入し激戦の末北条軍を追い詰め北条幕府を滅亡させた。

こうして、王政復古を成し遂げた後醍醐天皇は、武家政治を一掃し全権を掌握し1334年、年号を建武と改め新政権を誕生させた。しかし、同盟の足利尊氏は北条氏に代わって天下統一という足利家先祖伝来の野望を実現させようとその勢力を拡大して行った。この動きを察知した護良親王は、北条氏が滅び後醍醐天皇の親政を活性化させるためには、足利尊氏の排除が必要と感じて、集兵し尊氏との対立を表面化して行った。

この危機を感じた尊氏は天皇に親王について、よからぬ話しを箴言したことを天皇が信じて、親王を流罪として鎌倉に送ってしまった。そのころ鎌倉を実効支配していた尊氏の弟直義(ただよし)も、日頃の恨みを晴らそうと親王を



<昭和10年頃の
首洗い井戸と一本杉>

鎌倉二階堂の東光寺の土牢に幽閉してしまった。

その後、建武の中興と呼ばれた後醍醐天皇の行政も行詰り失敗の様相を呈し、幕府政治の復興を望む声が蔓延し始めた。建武2年(1335)北条高時の遺児時行(ときつら)が中心となり政権奪回を目指して鎌倉を侵攻した、直義も応戦したが大敗を喫し鎌倉を放棄して西走する際7月23日に親王の身柄が北条氏の手に入るのを恐れ、部下の淵辺義博(ふちのべよしひろ)に命じ親王を殺害させてしまった。

殺害され放置された親王の御首級を愛妾「南のお方(雛鶴姫)」が拾って葬ったと言われている。

愛妾「南のお方(雛鶴姫)」が鎌倉から京へ逃げる途中に王子神社(柏尾町)の井戸で御首級を清めたと言われており現在「首洗い井戸」としてその名残を残している。

御首級は本殿の床下に葬られたとの伝承から、王子神社と護良親王は造詣が深い神社として祀られている。

(2)浄土真宗本願寺派 成正寺【寄稿】

当山開基は、鎌倉時代、貞応元年(1222)夏の頃、当所領主齋藤武蔵守秀周の兄、齋藤兵部尉入道成正の願いにより、伯父にあたる法印海順大阿闍梨を招き、聖徳太子ご自作の16歳守屋退治の尊像を守り、また入道成正の守り本尊である『薬師如来』をご本尊として、「天台宗柏尾山法萬寺」と号した。開基海順は寿永2年(1183)11歳の時江戸麻布山にのぼり了海上人の許出家得度。その後17歳の時、京都比叡山に上った。

ご本尊である『薬師如来』は、一説によると日本『七柏尾七薬師』といい、全国にある7柏尾村に一体ずつ安置されていると伝えられている。甲州勝沼在柏尾村の現在「ぶどう薬師」と呼ばれているのが、その一体だと言われている。

建武元年(1334)、尊雲親王(護良親王)が鎌倉に囚われの身となり、天台宗比叡山の座主は法印長勸を関東に下し、親王を救出するため当寺に忍び居りましたが、時すでに遅く、同2年7月、親王は斬首となりました。窃かに首を奪い、井戸にて洗い(首洗い井戸)弔い、塚に松の木を植え、後に社を建立し柏尾村の鎮守とされた(王子神社)。

当寺第十五世覚順の代、浄土真宗本願寺の第八代蓮如上人関東へ下りし折、そのご教化を蒙り、速やかに浄土の真



〈阿弥陀如来立像〉



〈薬師堂〉

門に帰依。天台宗を改め浄土真宗に改宗した。上人より、「東谷山」と山号を下され、又、法萬寺建立の人齋藤入道成正の名をとり「東谷山成正寺」と賜り、ご本尊を「阿弥陀如来像」に改めた。覚順を中興の祖とし「浄土真宗成正寺」の開祖とする。

昭和37年、二十八世釋義雄師、本堂を再建。10年後、庫裡及鐘樓の改再建。昭和63年拙自代、本堂増改築。現在に至る。

【年中行事】

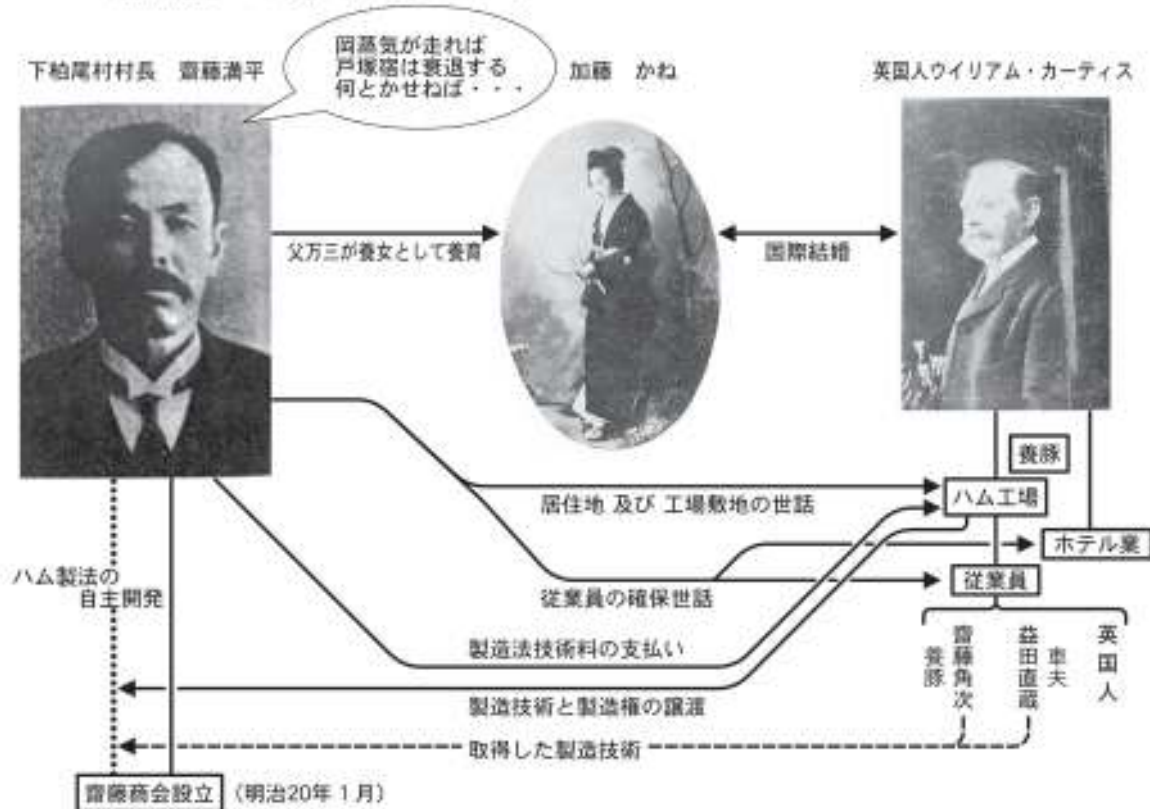
- 1月 元旦会・初御座 3月 春彼岸会 4月 永代経法要
- 7月 キッズサンガ 8月 盂蘭盆法要 9月 秋彼岸会
- 11月 報恩講法要 12月 除夜会

(浄土真宗本願寺派 成正寺住職 齋藤法海)

(3) 鎌倉ハムの由来

明治の初め、英国人のコック長ウィリアム・カーティスは居留地から乗馬にてたびたび戸塚宿を訪れ、腰掛茶屋の看板娘「加藤かね」と懇ろになり、国際結婚をした。カーティスはかねで「かね」が奉公していた齋藤家（満平）への縁故の力を借り、柏尾の地でハムの製造とホテル業を始めた。（添付図参照）

ウィリアム・カーティスとかねの結びつきと、齋藤満平がいなかったら日本初のハムは戸塚にあったか？



<齋藤満平とウィリアム・カーティス>

良質の田んぼでの農業と、東海道筋での商業で、人々の暮らしが成り立っていた下柏尾村（柏尾町）も、鉄道の開通で衰退を予想し、農業関連の特徴を生かした工業化の模索をしていた下柏尾村（柏尾町）の村長齋藤満平は、自身でハム造りの試作を行っていたがうまくいかなかった。満平はカーティスに「かね」を通じ、製造法の伝授を乞うたが実現せず、それ相当の権利金を払い製造法を入手した。その後、カーティスの工場で働いていた柏尾出身の使用人齋藤角次や益田直蔵の協力を得て、柏尾の村をあげてハム造りに取り組んだ。本格的工業化を図ったハム生産は柏尾が国内初で明治20年(1887)であった。その後、品質の向上に努め、明治31年(1898)帝国海軍に遠洋航海用貯蔵食料品として試され良好な評価を得た。また、明治35年(1902)には、米国セントルイス万国大博覧会に出品し、見事銀賞を受賞した。

「鎌倉ハム」名前の由来は、帝国海軍への正式入札の時、満平は品名をハムとしたため、固有名詞でないといけないとの指摘を受け、即座に鎌倉郡柏尾で生産しているので土地の名を付けて「鎌倉ハム」としたのが始まりと言われている。それ以降、柏尾村一帯で作られるハムの総称を鎌倉ハムといった。



〈今も残る赤レンガの建物〉

今も現存している日本初のハム生産のシンボルを表す赤レンガ建物は、横浜港にある赤レンガ倉庫とほぼ同じ形式で1階部は明治末の建築で、2階モルタル部は大正6年(1917)に増築されたものである。

(壁の厚さは約1m、壁が厚いことによる洞穴のような冷感を利用が目的)なぜこのような建物が必要であったのかは、当時ハム製造は夏場では肉等の腐敗のため不向きであったが、年間を通し製造するための冷蔵庫兼、現代流で言えば空調設備付工場が必須だった。

戸塚の工業化の先鞭をつけたハムが、なぜ柏尾から消えてしまったのかは謎であるが、古老の話をもとに推察してみると次の通りである。

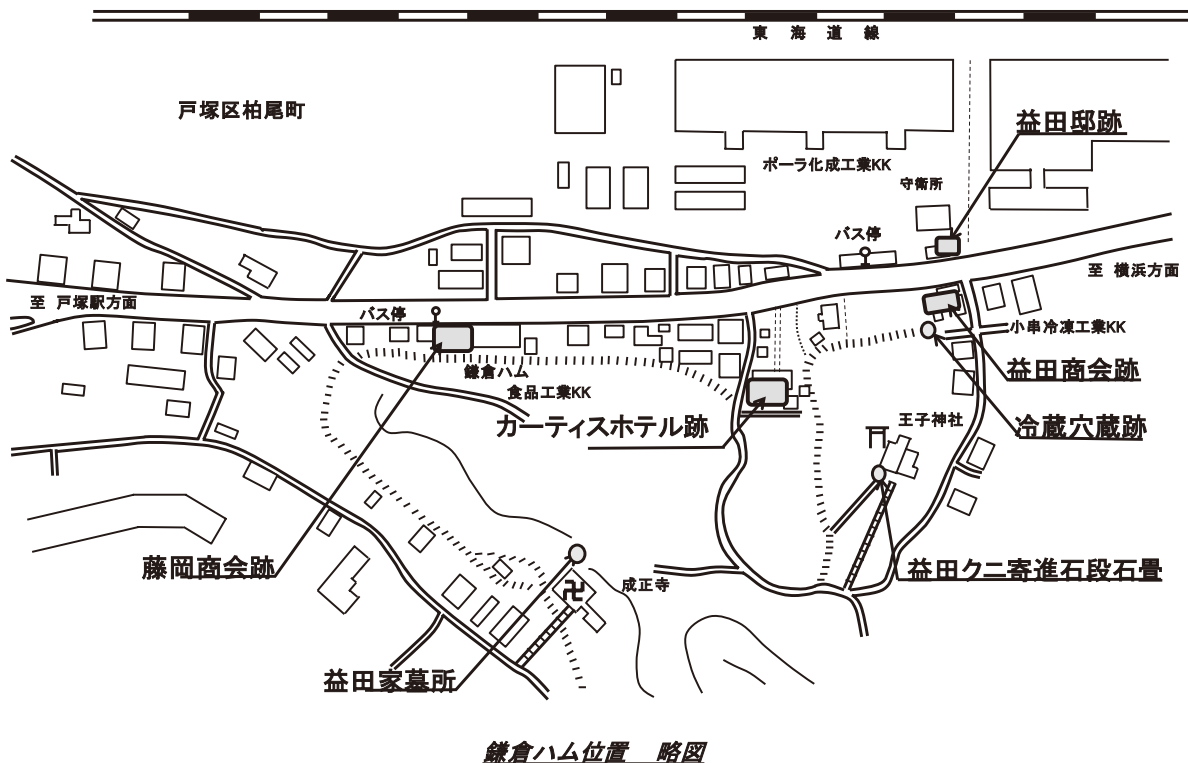
生産立ち上げ時は複数の生産者がいた。顧客開拓は当初は大変であったがその後、需要は順調に伸び、複数の生産者間で需要地や、豚仕入れ等の地域割振りの必要性が生じ、その結果、柏尾には一事業者が残った。しかし、その事業者は関東大震災等の影響で廃業し、柏尾町での生産は途絶えた。

他に移転した業者は、それぞれの地で生産を続け順調に事業を伸ばし、海軍のみでなく陸軍にもハムの供給を始めた。陸軍への納入は生産拠点の海外進出が必須で、戦火の拡大に伴い多くの拠点作りが要求され、それに対応した。

その結果、終戦で海外拠点を失い、事業拡大の夢は大正時代まで引き戻され、そこから這い上がり、現在でもかの地で生産を続けている事業者もある。柏尾に於ける、満平が夢にみたハム生産の工業化の夢はかなえられなかったが、現在の横浜の内陸工業地域（柏尾川流域）の礎を築いたことは間違いない事実である。その証は、今の柏尾町では、面積でほぼ3分の1が工場敷地で、全国的知名度の高い企業が進出し、操業を行っていることから判る。

< 鎌倉ハムの起源について — 益田直蔵氏の場合 >

今回の「柏尾の100年史」では鎌倉ハムの起源について「齋藤商会」の流れを、齋藤満平氏の子孫である齋藤満治氏（平成22年9月逝去）と生前より交際のあった「戸塚歴史の会」馬場芳宏委員の調査内容を中心に掲載したが、鎌倉ハムの起源については、その他に齋藤角次氏や益田直蔵氏の名前が挙げられる。



< 益田商会跡地略図（資料を基に編纂委員会にて電子化） >

今回記念誌発行に際し、益田直蔵氏の子孫にあたる柏尾町在住の益田勇氏より「鎌倉ハムの起源 - 益田直蔵の場合 - (秋山佳史作)」という資料のコピーをいただいた。この資料は「郷土よこはま 69号(抜刷)」（発行昭和49年3月30日）というもので、A4版で24ページにわたるものであった。

今回は誌面の関係もあり、また時間的に調査が難しいため掲載を割愛させていただいたが、その資料の23ページに「益田商会跡地」を示す筆者の貴重な手書き「略図」が掲載されていた。今回提供いただいた資料自体がかなり前の「コピー」であり、当時のコピー機の実力上やむを得ないことではあるが「裏写り」が激しいページも多いため編纂委員会の責任でこの略図を電子データ化させていただいた。それが掲載の「電子版略図」である。この図で見ると、当時の益田直蔵邸は現在のポーラ化成工業(株)守衛所辺りにあり、益田商会は旧東海道を挟んだ対面に位置し、英人ウィリアム・カーティスが営んだホテルが現在の猪熊邸(現「かっぱ寿司」横奥)付近にあったことが分かる。

- * 文中に何度か登場する英人ウィリアム・カーティスの和訳は資料により「カーチス」「カーテス」「カーティス」の3通りに分かれている。英名を和訳した関係でそうなるのだが、本誌では「カーティス」に統一させていただいた。

(4) 大山不動尊 (横浜市地域史蹟・柏尾の大山道道標)

大山には、大山阿夫利神社と追分不動尊が祀られており、江戸時代から広く関東一円の人々に信仰されていた。

参拝者は、旧東海道から大山街道を利用して伊勢原に入り、大山参拝に向かった。

この旧東海道から大山街道への入口が柏尾町であり、大山詣での参拝者の安全と無事を祈願するため現在の追分不動尊が建立された。

柏尾の人達も、雨乞いを祈願するため大山に参拝するのが恒例となっており、現在も継続されている。

柏尾の歴史的文化の伝統を将来に残すために、毎年7月27日に祭礼を行っている。

このような柏尾追分不動尊と大山道道標の歴史と伝統は、横浜市地域史蹟に指定されている。



<柏尾大山不動尊(柏尾ウォークにて)>

大山道への道標は次の四基で、ほかに灯籠一基と庚申塔一基があります。

- ① 寛政10年(1670)の建立。建立者は柏尾村。五処の橋供養をかねます。
- ② 正徳3年(1713)の建立。半跏の不動明王像(石造)を主体とします。建立者は柏木藤衛左衛門ほか。
- ③ 享保12年(1727)の建立。建立者は江戸神田三河町の商人越前屋小一兵衛。
- ④ 明治5年(1872)の建立。建立者は下総葛飾郡加村、船大工鈴木松五郎。庚申塚は、延宝8年(1680)、柏尾町施主15人により、灯籠は元治2年(1865)松戸宿の商人によって建立されたもので、大山信仰の広がりが見られます。

道標を含めた6基は、近代になって現在地に集められたと考えられます。

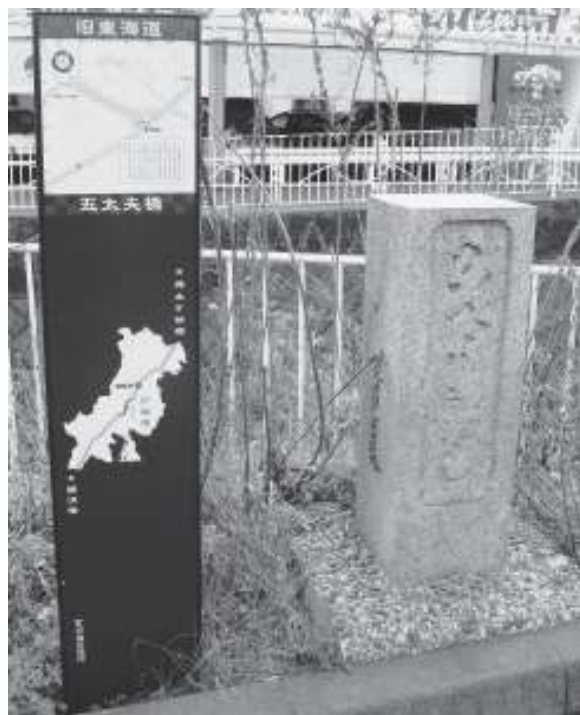
平成2年3月 横浜市教育委員会

(5)「五太夫橋」の由来

旧東海道戸塚宿の手前、現在の戸塚消防署吉田出張所付近の舞岡川にかかる橋を「五太夫橋」と呼んでいる。平成23年に橋の手前に、写真のような道標が設置されている。

石巻(康慶)五太夫は小田原北条氏の家臣で豊臣秀吉の小田原城攻めの前に北条方の使者として上洛した。その折、秀吉に捕らえられ徳川家康に預けられたが、家康は首をはねる事をせず、鎌倉郡中田村に謹慎させた。

家康が天正18年(1590)に秀吉に命じられて国替えとなり江戸に入る時、五太夫が壊れかかった橋を修理し、この辺りで出迎えたことから、五太夫橋の名がついたといわれる。泉区の中田町には五太夫の墓がある。



〈現在の五太夫橋の袂に残る道標〉

(6) 益田家のモチノキ

旧東海道の戸塚へ向かう不動坂の手前左側に2本の「益田家のモチノキ」が聳えている。想定樹齢300年のこの大木は江戸時代からこの東海道の移り変わりをを見てきている。もしこの大木が言葉を話せるなら、この100年の柏尾の歴史をどのように語るのだろうか？この木は江戸時代の参勤交代を見、明治維新の激動を経て、関東大地震の大災害や太平洋戦争の空襲にも負けず現在まで生き延びてきている。おそらくこれからの100年も生きるであろうこの大木を地域の大切な自然資産として大切に残したいものである。

昭和56年に神奈川県指定天然記念物として指定された際の由来書には次のような説明がある。是非一度足をお運びいただきたい。



〈益田家のモチノキ〉

神奈川県指定天然記念物

益田家のモチノキ

昭和56年7月17日指定

モチノキ（モチノキ科）は暖地に生育する雌雄異株の常緑広葉樹で、高さは通常3～8メートルに達し、4月頃に黄緑色の群生した小さな花を咲かせ、球形の果実を付けて赤く熟する。この樹皮より鳥もちを作ることからモチノキの名の由来があり、古くから人々によく親しまれている木である。

指定された「益田家のモチノキ」は、国道1号の旧東海道に面し、樹高18メートル、目通り2.4メートル、根回り3.2メートルの雌株と、これより0.75メートルほど離れて並ぶ、樹高19メートル、目通り3.2メートル、根回り4.9メートルの雌株の2本である。これほどまでに生長した大木は他にほとんど類を見ないばかりか、共に美しい樹冠で接しているのも珍しい。

「相模モチ」の愛称で郷土の人たちから愛され、なじまれてきたこのモチノキ2本は、稀有な大木となって今なお樹勢もきわめて旺盛であり、旧東海道に面してきたという歴史的背景もあるので、将来にわたり永く保護することが望ましく、神奈川県指定天然記念物に指定するものである。

神奈川県教育委員会

9 柏尾の沿革

記録によると柏尾村は天正18年(1590)に徳川氏の所領となり、その後旗下の村上内記、松平肥後守を経て太田播磨守と蜷川相模守の両氏が納めて明治維新を迎え、以後は神奈川県鎌倉郡に属することになったとある。(皇国地誌)

天保14年(1843)の家数44、人数289(横浜市史)。明治5年(1872)には質・春米1、濁酒造3、居酒屋1、茶漬1、菓子4、豆腐1、大工2、屋根1、鍛冶屋1、草履1、医師2、雑業1(横浜市史)。

明治9年(1876)の家数58、人数345。牡馬1、人力車30、荷車10、同12年の田23町2反余、畑19町余、山林20町1反余、民業は男農業36、工業1、雑業15、女農間木綿紡績52(皇国地誌)と記録されている。

浄土真宗本願寺派の成正寺と上下柏尾村の鎮守王子神社がある。字成正寺谷に植村庄右衛門正勝宅跡を記す。(風土記稿)

明治22年3月(1889)、上柏尾村、下柏尾村、舞岡村、平戸村、品濃村、前山田村、後山田村の7ヶ村を合併して川上村と称す。(川上村地番反別入図より)

10 柏尾の昔

<柏尾に電灯がついたころ> 柏尾に電気が入ったのは大正6年の頃で、それまでは永年灯明石油ランプの生活でした。明治45年頃久保井吉五郎氏(柏尾185番地)が石油発動機による精米を始めたが電力が普及すると電力モーターの世となった。当時の電力会社は相武電力(株)でその後大東亜戦争に際し統合されて関東配電(株)になり、現在の東京電力になっている。(貴重な電柱は箱根の材木屋に朝4時起きをして日帰りでリヤカーを引いて買いに行った。)それまでは4合瓶を持って灯明の石油を久保井油店に買いに行った。

<蛍とり> 夏になると蛍がたくさん飛び7月14日の八坂神社のお祭りの頃は蛍の最盛期で家の周り一面どこでも手づかみで蛍がとれた。今は“蛍がり”というが当時は“蛍とり”といった。

<東海道の乗合自動車> 大正12年(1923)戸塚駅からお三の宮(現吉野町付近)間を乗合自動車が走るようになった。相武自動車(株)(神奈中の前身)の五人乗りの幌型の「スター」という外車で料金は一軒家前からお三の宮まで大人70銭、キップは直売と前買いがあり、前買いは一軒屋で売っていた。1日5往復であった。

<一軒屋の柿> 一軒屋の柿は昔、果実の少ない時代に大変重宝がられた。柿の木畑は市場谷にあり品種は主に衣紋柿(渋柿)とぜんじ丸(甘柿)。後には

接木により甘柿にかわっていた。明治、大正時代一軒屋の衣紋柿は、酒をふきかけ鏡ぶたをうちこむ樽柿という方法で脱渋して販売された。多い年は四斗樽で780樽も出荷されて遠く北海道まで送られたという。馬の背で神奈川まで運び舟便を使ったとのこと。その代金で仕入れた海産物は市場谷戸（柏尾郵便局付近）の市で売りさばかれたという。

<ズイ虫取り>

田んぼの稲作に農薬がなく、5月上旬頃になると上級生の子供達は稲に害を及ぼす虫とりをした。1m位の細い竹の棒で稲苗をなびかせ尺取虫やズイ虫とりをした。とった害虫を数えて紙の袋に入れて学校に持っていくとほうびがもらえ喜んだ。

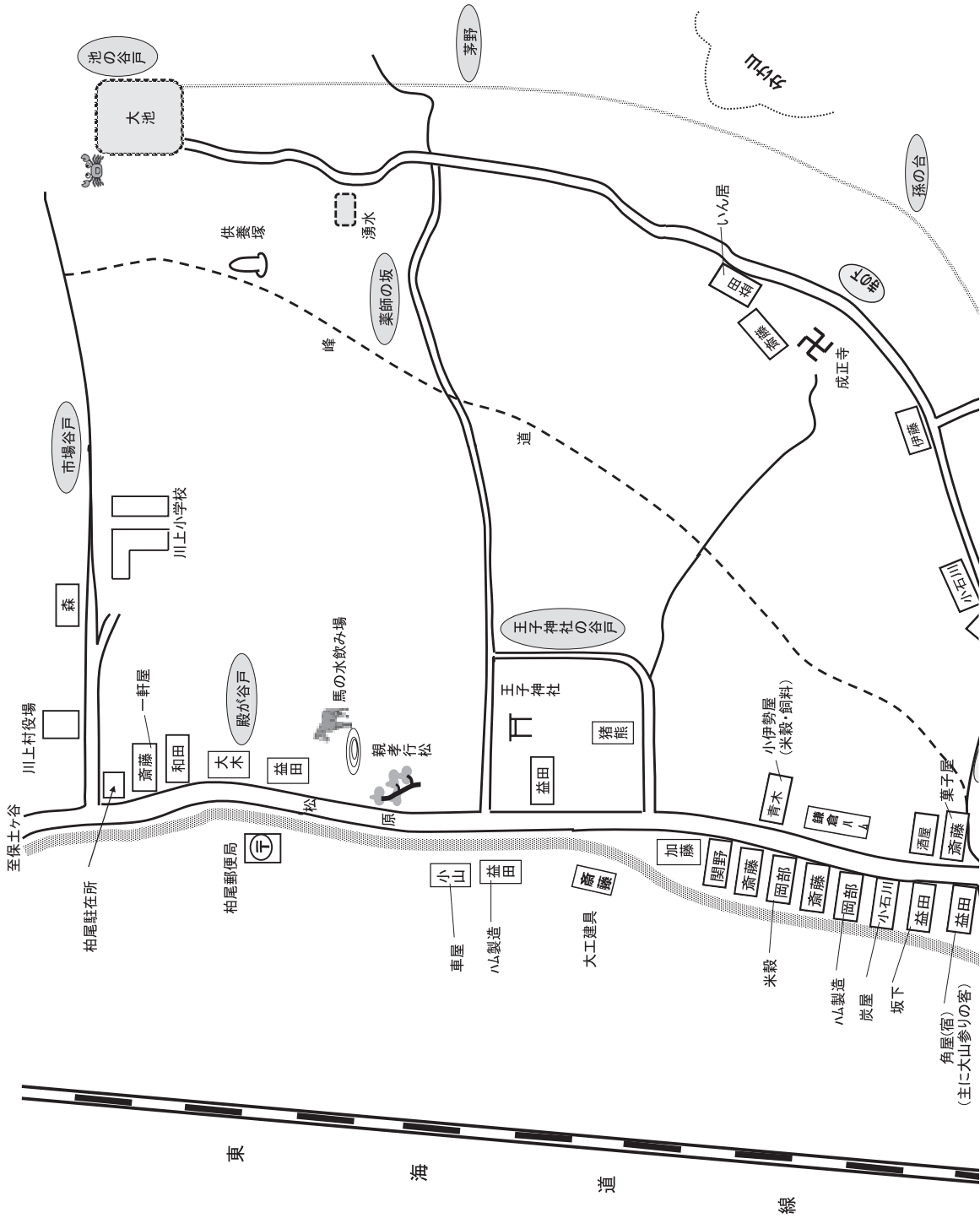


<ズイ虫取り 昭和10年前後>

<新しい東海道の建設> 昭和5年に失業対策事業として出来た新しい東海道（五太夫橋から不動坂までの距離で現在の1号線）はその頃車も人も殆ど通らず時々牛馬車が通る位であった。道路は牛馬車が通過時に行う糞集め（当時の貴重な肥料）をする程度で危険なことは無く、子供達の良い遊び場になった程のどかであった。昭和10年（1935）には川上村・戸塚・大正村にわたる国道1号線は舗装工事が完成した。（一部「ふるさと戸塚」から抜粋）

<昭和初期の柏尾の地図> この地図は柏尾町の齋藤英夫氏所蔵の資料で、原本は手書きで、当時の道路や地形、史蹟、住居の様子が詳細に書き込まれている。編纂委員会ではこの資料を基に、出版した際の見やすさを考慮し、かなりの時間を費やし「電子版」を作成した。その上で、当時の家業や「屋号」も調査し書き加えたものがこの「地図」である。更に現在の不動坂周辺の道路を点線で記載し、比較参照できるようにもしてある。尚、家業や屋号はあくまで当時のもので、その後多くの変遷を経ているので誤記や記憶違いもあることはご了解いただきたい。この電子版「柏尾の地図」に対する内容の責任は全て編纂委員会が負うものである。

尾 柏 期 初 和 昭



<昭和初期地図-1>



〈昭和初期地図-2〉

〈屋号〉

江戸時代には、原則としては土農工商の身分制度により武士以外の者が苗字を名乗ることが認められていなかった。そのために、商人や大きな農家（豪農）が取引をする際、あるいは日常生活の上で区別が必要だったことから、屋号を使うようになった。近世の村々には同姓（同苗字）の家が多かったこともあって、日常は屋号（屋敷名）を呼び習わした。

屋号の呼び方には以下のようなものがある。

- ① 祖名（久作・太郎兵衛など）
- ② 家の本末関係（大家・本家・分家・新家・新屋など）
- ③ 屋敷の所在（東・中・南・上・下など）
- ④ 屋敷や家の特徴（門屋・板谷・柿の木屋敷など）
- ⑤ 特殊職業名（酒屋・酒屋・紺屋など）
- ⑥ 嘉名（かめい）（弄屋・栄屋などで新しい傾向）

11 柏尾の原風景

(1) 成正寺本堂落成祝いと稚児行列

別項にも紹介記事があるように柏尾町には成正寺という浄土真宗のお寺が古くからあるが、この成正寺が昭和37年（1962）に現在の本堂を檀家の寄進で立て直した際盛大に落成記念法要を行った。

その時に行った催事のの一つがここに載せた「稚児行列」である。小学校入学前の柏尾の児童約50人に写真のような特徴的な衣装を着せ、厚化粧をさせたうえで、檀家役員の齋藤与三郎氏宅前から成正寺まで約1kmを成正寺の名入の提灯を先頭に地域の役員も多数正装して参加している。先頭付近には柏尾町内会第2代会長の板寫源蔵氏の顔も見え、当時の



〈本堂前での記念撮影〉
（加藤榮作氏所蔵）

住職の齋藤義雄氏が行列の中央に位置している。写真の場所は、現在の江橋住宅総合サービス社前の辺りで、齋藤茂氏宅（志んや）前から大工の棟梁森信秋氏宅前に掛かったところである。道路の反対側には、まだ住宅もなく、稲の刈取り途中の田んぼには稲が干してあるのが良く分かる。行列のはるか後方には柏尾公民館の火の見やぐらが聳えており、まさに今から50年前の柏尾の谷戸の原風景を映し出している貴重な映像である。（加藤榮作氏所蔵）こうした記録を大切に保存されていた先輩諸氏に心から感謝したい。



〈柏尾の谷戸を進む稚児行列（昭和37年：加藤榮作氏所蔵）〉

(2) 不動坂とワンマン道路

柏尾の不動坂は、現在では交通渋滞の交差点として有名だが、江戸時代には大山阿夫利神社への大山道の玄関口として、追分不動尊があったことからこの名が付いたと言われている。また旧東海道の戸塚宿へ続く街道として栄え、中宿や角屋などの宿屋がこの辺りにあったと記録に残されている。

この不動坂も昭和6年(1931)の東海道1号国道の舗装工事で大きく変わり、更に昭和30年(1955)に「ワンマン道路」が開通したことで現在の姿に近いものとなった。このワンマン道路という名前は、当時の首相吉田茂が大磯の私邸から東京に向かう際に、いつも戸塚の大踏切の渋滞に業を煮やし建設を指示したことから、吉田首相のニックネーム「ワンマン宰相」の名を取って「ワンマン道路」という俗称になったもので、元々は「戸塚道路」というのが正式な名称である。開通当初は有料道路として現在の「神奈川三菱ふそう」辺りに料金所が設けられたが、昭和34年(1959)に横浜新道に編入され、更にこの区間の償還が終わった昭和39年(1964)に無料開放され、その後料金所も撤去されたものである。

このワンマン道路の開通後間もない当時の貴重な写真が、平成21年(2009)の戸塚区制70周年記念誌「とつか70年目の風景」の表紙を飾っている。この写真の遠方には、ブリヂストン横浜工場(70頁参照)の今はない有名な煙突がハッキリ写っている他に、左隅には柏尾で古くから酒店を営業していた柏屋商店(74頁参照)の旧店舗が載っている。当時この柏屋商店の左隣に戸塚警察署不動坂交番(昭和23年設置)があり、更にその戸塚寄りに神奈川中央交通の「不動坂バス停」があった。

現在の不動坂周辺の状態と比べると50年の時代の流れが良く分かる写真でもある。因みにその後不動坂交番は昭和54年5月30日に反対側の「瀬谷柏尾道路」入り口近くに移動している。



〈昭和32年当時の不動坂交差点〉
(「とつか70年目の風景」より)



〈現在の不動坂周辺〉



〈現在の不動坂交番〉

(3) 益田俊夫邸の解体と新邸建築の記録 — 古いものから新しいものへ —

この記録は、柏尾町1217番地の益田俊夫氏が昭和43年(1968)から44年に掛けて現在の住居を建て替える際の1年間の生活記録を、成正寺の前住職齋藤義雄氏が8ミリフィルムで撮影したもので、俊夫氏が亡くなられた翌年の平成17年(2005)に、長男の益田武司氏が「父 俊夫を一周忌に偲ぶ」(我が家の記録)と題して編集し、近親者やご近所の方々に一部を公開したものである。

益田俊夫氏は地元の生まれで柏尾小学校PTA会長や町内会役員、王子神社氏子役員などを歴任され、「隠居の叔父さん」として親しまれた方でもあった。

お借りしたVTRには1年間の家族の生活(餅つきや親族の新年会など)も写っているが、今回益田武司氏の了解をいただき、当時の茅葺屋根の旧益田邸とその解体場面、更に新築へ向けての人々の動きなど、「柏尾の原風景」ともいべきシーンを公開させていただくことにした。現代の技術と比較すると画像の解像度は当然低いが、40年以上前にこうしたビデオ撮影が行われていたことは驚きであり、当時の情景がまざまざと蘇ってくる。

写真①：解体前の益田俊夫邸、典型的な茅葺き屋根の大きな家であった。玄関を入ると土間があり、そこで餅つきなどを行った。まだガスのない時代は家の中の竈で薪を燃やして煮炊きをしたので永年の間には家の中が煤で汚れて柱などは黒光りしていた。

写真②：茅葺きの屋根の解体。屋根の半分ほどが取り払われ、基部(柱と梁)が出てきている。前述のように煤で汚れて真っ黒になっているのが分かる。当時は茅葺き屋根の家が多く、その葺き替えは「茅無尽」の加入者の家を順番に、皆で助け合いながら行なった。柏尾には王子神社所有の茅野が2か所あり(現富士見台西端部と柏尾町1127番地奥)秋になって茅が枯れると村人が総出で刈り取った。

写真③、④：屋根の葺き替えを行うと体中煤で真っ黒になる。帽子や衣服で体を覆っても顔だけは出すので、顔は真っ黒で目玉がギョロギョロとなる。

写真⑤：外した古い茅は空き地で盛大に燃やした。当時はこれが普通であった。

写真⑥：更地になった建設予定地で成正寺前住職が地鎮祭を行う。立ち会うのは大工の棟梁(工事責任者 森伊八氏)と益田家の家族。

写真⑦：そして晴れの建前(上棟式)。当時は建前には祝い餅や縁起を担いで5円玉をまき、村人が争ってこれを拾った。

写真⑧：建前の祝いの席。工事関係者や家族だけでなく近所の人々もお祝いに駆けつけ大騒ぎになる。料理は出前などなく、隣組の女性陣が手分けして作ったものである。

写真⑨：祝いの後、屋根に飾った3本の幟を立て、先頭のダットサンには大工の棟梁らが乗り、谷戸の道を棟梁の家までパレードした。

写真⑩：新築なった現益田邸。



① 茅葺き屋根の旧益田邸



② 茅葺き屋根の解体作業



③ 煤で真っ黒の村人



④ 屋根で作業中の益田庄作元町内会長



⑤ 空き地で盛大に古茅を燃やす



⑥ 成正寺前住職による地鎮祭



⑦ 建前の祝い餅をまく



⑧ 建前の祝いの席



⑨ ダットサンを先頭にパレード



⑩ 新築なった現益田邸

〈益田俊夫邸の解体と新邸建築の記録（昭和43年～44年）〉

12 柏尾市場

柏尾市場は昭和28年(1953)世の中が終戦の混乱から少し落ち着いてきた頃、柏尾町在住の大地主だった齋藤萬治氏が柏尾町に所有の貸家(ハム工場の工員宿舎だった)に、商店を招き入れる市場の構想が練られた。当時、国鉄戸塚駅に隣接の公設市場に出店していた日の丸(製麺、コロッケ、フライ惣菜:広瀬) 土橋履物店(履物・和装履物・下駄・傘) 日高園(お茶と海苔→柏尾では日高商店、酒、燃料)に声をかけ、更に魚安(魚:小俣) 岸村商店(八百屋:岸村) 代本屋(本、おもちゃ、プラモデル:江尻) 小松屋(パンと食料品:向山) 大槻商店(佃煮、漬物、乾物) ピック(精肉) くるめ屋(毛糸、手工芸品雑貨:有馬) 瀬戸物(安東) ゑびす屋(菓子:大塚) クリーニング店(石川) 肌着衣類店等が加わり昭和29年(1954)頃「柏尾市場」として誕生したようである。

近くには京ばしカメラ(写真館)、齋藤牛肉店、長谷川豆腐店、かどみせ(菓子:内島)もあり、その後靴屋(修理:富沢) テーラー(福田)が加わり昭和30年(1955)~40年(1965)頃ほどの店もとても繁盛して 近隣の舞岡方面や、岡津の方からはバスに乗って買物に来る人も多く朝からにぎわっていた。当時はまだ各家庭に冷蔵庫は普及しておらず、お弁当のおかずや朝ご飯のおかずの支度に、朝6時前から食料品店に買物に来た人もいた。



〈柏尾市場ゑびす屋店頭〉

その頃は住宅地でも朝早く納豆売りや豆腐、あさり、しじみ等売り歩いていた。各お店からひさしが延び、通りはアーケードになって雨がふっても傘なしで買物が出来る便利な市場で入口には「柏尾市場」と書かれた大きな看板もあった。昭和35年(1960)には東郷医院もでき、昼間など行き交う人の肩が触れ合う程のにぎやかさであった。その頃は道路も現在とは少しちがっていて、市場の端の道がそのまま国道につながっていて、両側にブリヂストンの社宅が建ち並んでいるなかを道を出るとすぐ左側に戸塚駅行のバス停留所があった。(元くりはら菓子店の前)

昭和36(1961)~37年(1962)頃は舞岡川が氾濫し、床上浸水の被害もあった。

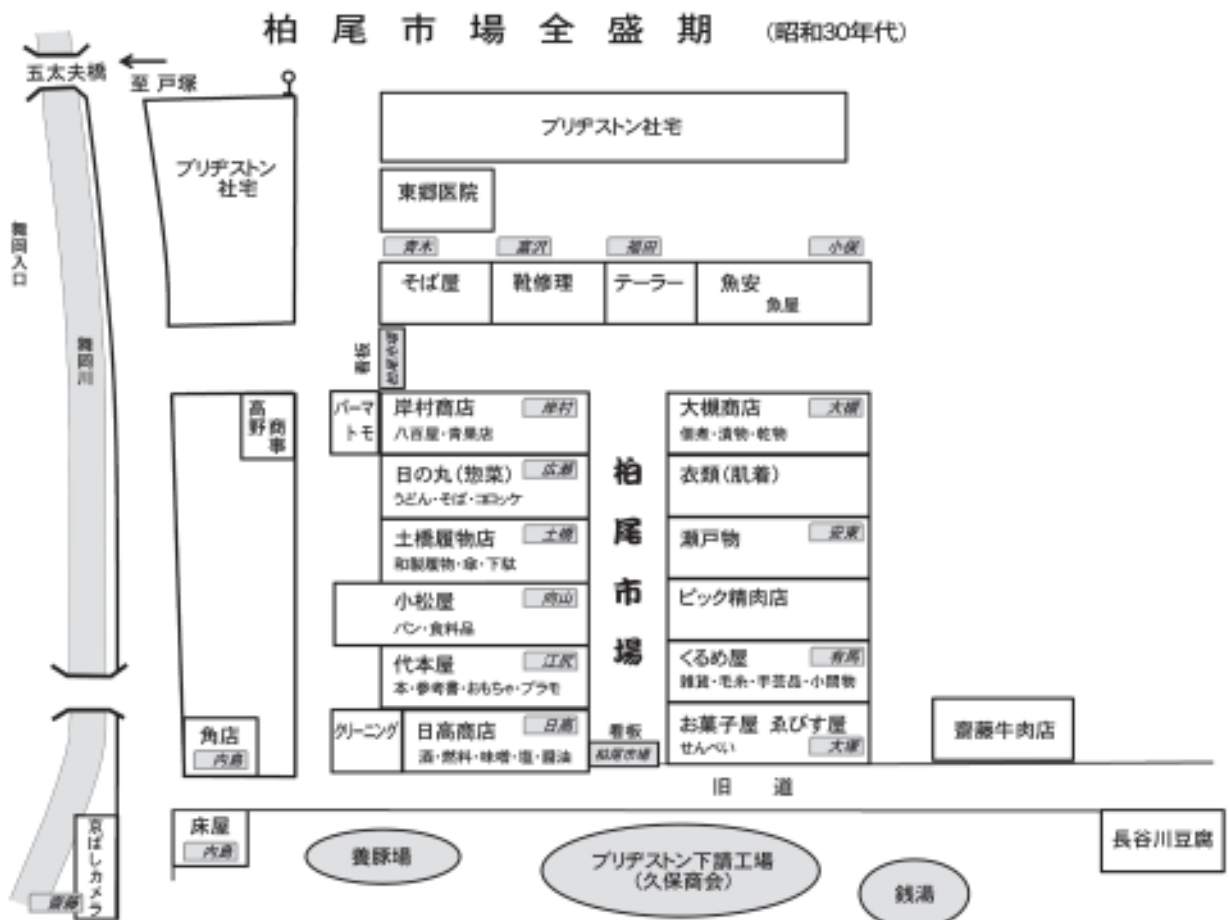
その頃、新潟からご家族で上京された幼少の高野氏は戸塚駅に降りた時、賑やかな都会だなと驚かれたそうである。その後昭和42年、柏尾市場の外側に

高野商事を始められた。向かいに美容室トモ、市場の中でも丸山時計店やそば屋（青木）、益田園（花屋）等が入った。

昭和47年（1980）3月吉田町に、初の大型スーパー「ダイエー」ができて、人々の足は急激に減少した。たまたま冷蔵庫の修理が必要だったピック精肉店が撤退したのを皮切りに徐々に閉店するお店が増え、代わりに入るお店もなく、昭和50年（1975）には東郷医院も診療所が通り一筋向こうに移転した。平成23年10月現在（2011）代本屋本店、丸山時計店、高野商事、ヒダ薬局の4店舗のみが残っている。

柏尾市場が最盛期のころ、市場の舞岡側の向こうには養豚場、ブリヂストンの下請け工場、銭湯等もあった。市場の入口辺りでは紙芝居屋さんがあり、水飴やフワフワせんべいを食べながら見るのが子供たちの楽しみであった。

（丸山正夫氏、向山恭子氏、高野三郎氏、東郷醇子氏、富沢春雄氏から聴取り）



< 柏尾市場の全盛期（昭和30年代） >

13 益田茂平氏手記

冒頭にも述べたように、大正3年(1914)、当時の川上村下柏尾に生まれ、舞岡に移った後、町内会長を始めとして戸塚区の連合町内会長まで勤められた現在97歳の益田茂平氏が今回の「柏尾の100年史」のために貴重な体験を4つの手記にまとめてくださった。益田茂平氏自身が「生きた100年史」そのものであり、氏は既に平成19年(2007)に舞岡小学校の児童のために「幼き日の舞岡」という自叙伝を出版されている。今回の手記ではその自叙伝で触れられた事項の他に、「生まれ故郷の柏尾」のためにいくつかの新たな記述を加えていただいた。できる限り原文に近い形で掲載させていただいた以下の手記を是非心して読んでいただきたい。(編纂委員会)



〈益田茂平氏〉

下柏尾に生まれて95年6ヶ月、当時の下柏尾は追分、台、下、谷戸、尾崎台、切通し、6つの地名から成り立っています。さてこの下柏尾の地名はいつ頃から、始まったかは定かではないが、横浜市の要覧に記載されている町名は明治期の市町村制施行からの村名が考えられます。この6つの地名の中でも「谷戸」の地名だけはもっと昔から呼ばれていたと思われま

す。柏尾公民館は、私が小学校3年生、大正12年(1914)には建設中でしたが、大正12年9月1日の関東大震災のため一時中止のやむなきになり、半年後(1915)に落成祝いが行われたことを記憶している。

(1) 谷戸の大池について

現在の柏尾小学校の下にあるハス池は雑木林に囲まれ菱が自生し実が取れた。この池は天然氷を造る井戸が設けてあった。この大池までは農道で約120mの上り坂があって登り切ると田んぼの用水池として毎年干ばつ時には栓が抜かれ谷戸中の稲の干ばつをうるおした。この大池を中心に農夫の人達で賑やかな野菜作りができた。昭和35年(1960)頃から都市化の波は区内各所に押し寄せ柏尾地区も至る所の地形を変貌させてしまった。従って人口も急増し当時の農家の生活状態や形態も急テンポで昔の姿から脱皮してしまった。

この地に住む者として望郷の情にかられずにはられません。この度、柏尾町内会の100年史編纂委員会の設置、編纂委員の募集をなされ設立に向かって前進されていることを心より感謝申し上げます。

どこかでだれかが発想されませんかと不透明のままふる里はなくなってしまう

います。大正時代の初期に誕生した者として思いを昔に戻し下柏尾地区の資料の発掘と収集調査とを自分の記憶とを見合わせ下記に記述して見ます。

(2)下柏尾 大正時代の地名と戸数

一軒屋の谷戸、鳥ヶ谷戸、篠塚、王子神社の谷戸、不動坂、セイノ神道（益田組裏）、石橋、尾崎台、四つ杭、一つ山（秋元眼科裏山）、切通し、カジヤの山（孫の台）、一本杉、首洗い井戸、オクラ、寺の下、カヤノ、馬頭観世音の谷戸、分け山（馬頭観世音先の山）、薬師堂、コウノス、池の谷戸、中の谷戸、オイセミヤ 等の地名から成り立っています。

大正時代の戸数と職業（誤字がございます おゆるし下さい）

追分け 22戸

森 由蔵 上柏尾町206	斎藤 忠次郎 農、商 一軒屋
和田 吉五郎 農	大木 長吉 勤、農
益田 清蔵 勤、農	小山 玉吉 車屋
益田 直蔵 自転車屋、鎌倉ハム	益田 仙吉 農
斎藤 政吉 大工	斎藤 秀夫 建具屋
猪熊 元之助 地主	斎藤 繁治 農
青木 栄造 米穀商	岡部 芳太 農
斎藤 市郎 勤	岡部 福蔵 まんじゅう屋、鎌倉ハム
小石川 源蔵 農業	益田 田次 農
益田 彦六 運送	斎藤 もりぞう まんじゅう屋
西ヶ谷 豊次 農	

台 15戸

益田 新蔵 益田組	斎藤 新吉 運送、農
益田 慶助 農	加藤 石造 農、アメヤ
益田 鉄造 農	斎藤 かめ 天理教
斎藤 角次 農、鎌倉ハム	加藤 民蔵 農、勤
加藤 ハル 綿屋	板島 源助 勤
石川 吉蔵 農	小石川 総吉 人力車
森 由松 農	杉山 農次 勤
金子 香春 酒屋	

下 11戸

猪熊 秀次 ビンガラ屋	吉田 市蔵 鍛冶屋
斎藤 平兵衛 農、玉屋	山田 半造 半農
斎藤 健司 銅工屋	長谷川 大吉 豆腐店
斎藤 萬治 鎌倉ハム	斎藤 茂吉 下柏尾町内会長
久保井 亀次 油屋	長沼 清治 勤、鎌倉ハム
深野 徳次 人力車	

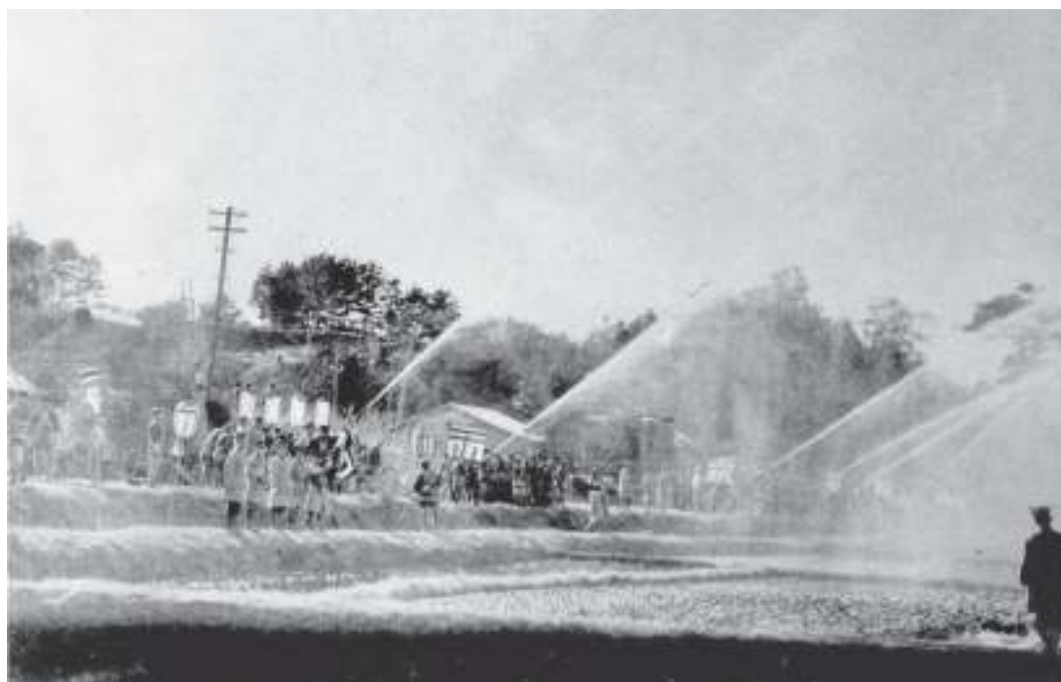
谷戸 12戸

小石川 倉吉 運送店（切通し）	齋藤 彦次 農
森 福松 大工	小宮 利平 農
益田 幸太郎 農	中嶋 正平 勤、農
小石川 初治 農	伊藤 酒蔵 農
齋藤 春次郎 農	成正寺
齋藤 善吉 農	益田 又吉 農

下柏尾は以上60世帯から構成されていた。

(3)下柏尾消防団とは

川上地区に消防団が出来、大正15年（1926）10月28日に認可された。齋藤萬治氏が組頭に任命されている。齋藤氏は今の柏尾の赤レンガ、当時の鎌倉ハムの主人だった。組織にはほかに補佐する組頭代理として、子頭から2人子頭は41名、その下に消防手350人と喇叭手の編成だった。喇叭手は火災現場には先頭になって向かった。下柏尾消防団の喇叭手は益田長次氏（柏尾町446-2 益田慶助氏の長男）だった。消防組はのちに消防団と名を改めた。第一部は上柏尾、第二部は下柏尾、第三部は舞岡、第四部は平戸、第五部は信濃、第六部は前山田、第七部は後山田。毎年正月の出初式は今の山崎製パンの国道側「セキボリ」といって田んぼの用水路の小川を7つにせき止め、腕力ポンプ出水速度競技が盛大に行われた。その後は戸塚消防団の第二分団となり戦時中防空も加え警防団に改組された。警防団の初代団長には岡部福蔵氏が就任している。



<消防組の一斉放水>

明治34年(1901)2月4日下柏尾の某家から出火して4世帯が焼け、この飛び火で谷戸の成正寺が焼けた。これに伴い火災予防に専念。貯水池を設けることとし、追分の957番地1箇所、台446番地と1010番地の2ヶ所、谷戸の大谷戸入り口981番地にそれぞれ5m4方のもを設置した。並んで地震場小屋があり、宵になると順番制で拍子木を鳴らして夜回りをし、火災盗難予防に当たった。

(4) 柏尾の祭礼

村の鎮守王子神社祭礼は毎年9月13日と定められ、この祭りは一名“呑み祭り”といわれ毎年「こもかぶり」四斗樽で2樽が抜かれた。道行く人は誰にでもふるまった。中田、和泉、舞岡方面の農家の人たちが旧市内に市場や肥え取り(下肥:当時は農業の肥料)の馬車、牛車等と荷車が連ねて往来していたが、祭りのこの日は旧東海道に車を置きざりにして立ち寄り、一杯機嫌で帰って行った。又旧猪熊元之助さんの裏の畑をつぶして芝居を呼んで氏子、村人を楽しませた。参道には模擬店が立ち並び子供たちの喜びの楽しい祭りであった。

川上村7部村の小学校の子供達はどの部落の祭りでも学校は休日での祭りである。生徒のみが神社に行き先生も来てお話があった。子供達は祭礼の日が待ちどうしく家庭の中であって楽しみながら農業の手伝いをしたものである。それは賑やかな祭りで参道の入り口には昇旗が両側に立てられ、太鼓と獅子舞が鳴りひびきどこの家でも赤飯(おこわ)とお煮しめでお祝いをした。

(5) 鎌倉ハムの製造について

皆さんが知るところですが、鎌倉郡川上村下柏尾(現柏尾町183番地)齋藤満治氏の宅地には昔の古い門と板塀、それに赤レンガの倉庫があります。こちらは旧東海道の道筋で独自の景観をつくっています。赤レンガは齋藤商会の工場の冷蔵倉跡で大正時代は横浜開港により様々なものが外国からもたされましたが、戸塚区にとっても下柏尾(柏尾町)にとっても忘れてはならない齋藤家と冷蔵倉です。当時外人専用のホテルを経営していた英国人のカーティスから苦心の末ハムの製造法を伝授され、横浜で日本人として初めてハム製造をされました。当時下柏尾は鎌倉郡に属していたので、「鎌倉ハム」の名で広く販売されたものです。毎年正月2日には初荷の旗を立て、荷車で戸塚駅にハムの出荷をし、一日中酒のふるまいをしたものだが、残念なことに、支那事変、大東亜戦争で物資不足から製造ができなくなり、やむなく中止されたものです。ハム造りは他に益田直蔵氏、岡部福蔵氏、齋藤角次氏の3方も始めていたが共に廃止となった。

(6) 谷戸の大池について 2

今の柏尾小学校のある付近に中の谷戸までは田、畠ばかりで山には大きな杉林、雑木林があって、その中央に周囲200m位の大池があった。(今の柏尾小学校下のハス田) 益田又吉さんからは谷戸坂があり(約150m) 登りきると用水池があって菱が自生しこの池には天然氷を造る井戸が設けてあったと伝えていた。この谷戸9軒の農家に電灯がともったのは大正6年、箱根まで電柱運搬に行った苦労話を祖母に聞いたのをおぼえている。この用水池は谷戸全体の田んぼが早魃の時に毎年使用する命の綱の用水だが、切り通しの下田んぼまでは水が届かないので下柏尾消防団の消防車で追分の597番地(故) 齋藤秀夫氏(元建具屋)の下セキボリから、王子神社の参道をホース15本位を繋いで高台から谷戸1202番地の田んぼに水を落とし、早魃を凌いだ青年団の活躍は今でも忘れられない。当時の下柏尾消防団支部長は齋藤熊蔵氏であった。

(7) ビンガラ編み

ビンガラ: 材料は麦ワラをビール瓶の入る大きさに木綿糸で編んだもので輸送中瓶の破損防止に使うもの。昭和10年頃(1035)小学生5,6年生から高等科の子供達はどの家でも「ビンガラ」作りに働かされた。下柏尾公民館建設の補助金としても、ビンガラの1ヶ月のノルマは、一人で500本位(100本1束で10銭)扱者は中宿(なかじゅく)で、柏尾町1014番地(中宿は今は赤レンガのマンション)で現存している。これは子供達の仕事で家庭の生活費にも充てられた。学校から帰っても、日曜日にも働かされたものだ。

(8) 関東大震災大惨事

震災の思い出: 大正12年9月1日(1923)午前11時53分におきた。この日は朝から強い雨が降りむしむしした重苦しい日であった。でも雨は幸い10時30分頃にはやんで日のさしこむ天気になり12時前にはすっかりよい天気になった。学校の始業式も雨あがりと同時に終り各家庭では昼食の準備に追われていた。その時地底からつき上げるような爆発音とともに地面が上下左右に「ぶらんこ」のようにゆれ四つん這いになったりころがされたり・・・一日中振り子の様に垣根につかまりっぱなしでその規模は報道による阪神淡路の大震災の倍ぐらいと思われた。私の家では昼食中で私も家族もどうやって外に飛び出したのか覚えがない。気がつくとき食事をしていた時の箸を持っていた。

東京、横浜は昼食時と重なったため至る所で火災が発生し火に囲まれた人達は上げ潮時の河川に飛び込み、河川は折り重なった死人の川となった。私も友達とY校の裏側の川の惨状を見にいったが死人の山だった。

大正12年9月1日関東大震災の下柏尾は家が50戸余りだったが殆どの

家が全壊または半壊の家ばかりだった。しかし不思議と火災は起きなかった。倒壊も瞬時に起こったものでなくその後しばらく続いた余震で倒壊した家が多かった。余震は震度 5～6 位の強さが 1 ヶ月は続いた。5 ヶ月後の大正 13 年(1924) 1 月 15 日の余震は東海道線が大山踏切で脱線した程である。

最初に倒壊したのは台の 1008 番地の加藤石蔵さん(草葺き屋根)の家だった。其の後 東海道に面した多くの家が余震で倒壊した。家を失って東京、横浜から避難する人達は東海道の地割れを「またいで」小田原方面に向かった。道はこの人たちで埋めつくされ、倒壊した家は道側に倒れ、歩行するものも容易ではなかった。

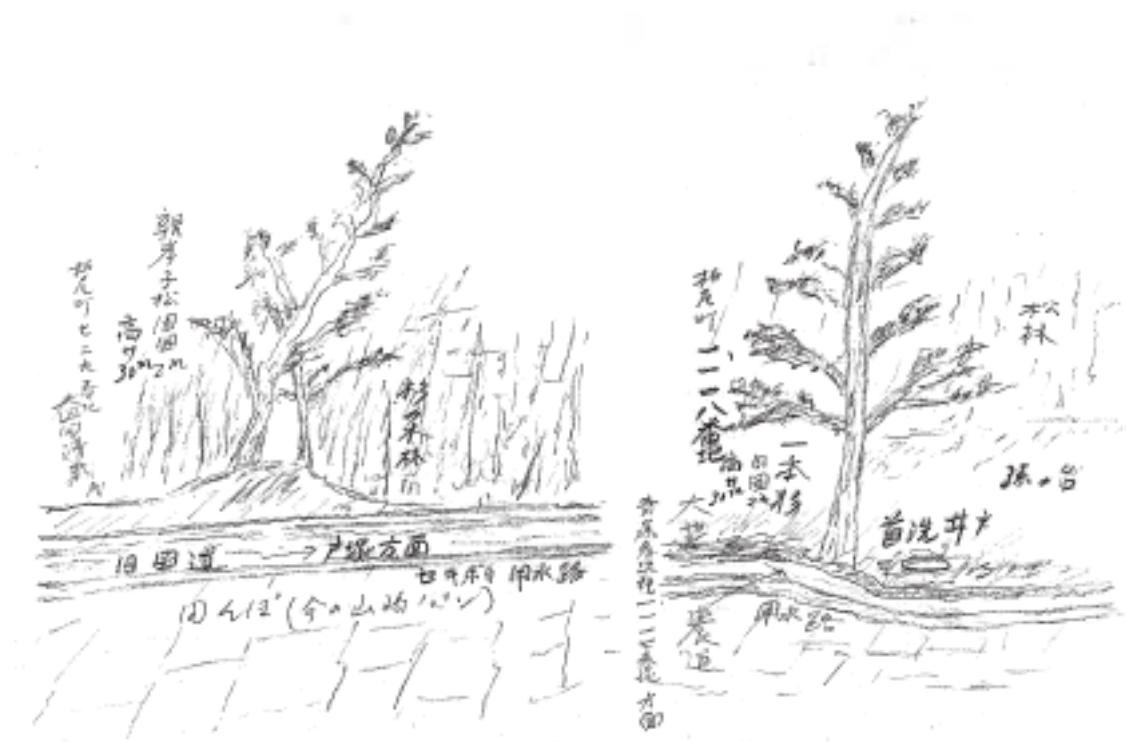
この避難する人達は4～5日は続いた。今のように テレビ、ラジオは無く全く状況が判らず、このような 余震続きに村人はおびえて家に入ることができず、外庭に蚊帳を吊ったり、仮小屋を自分自身で作って12 ヶ月はそんな生活をした。幸いに農業であったので食料は俵で玄米や麦があった。魚肉類は手に入れることは出来ず野菜食で過ごした。東海道は両側の家が倒壊し、電柱は折れて倒れ 1 ヶ月ぐらいは電気無しの生活が続いた。だから 3 升ぐらいの玄米を臼でつき、一升瓶の中に玄米を入れ、棒でついた。やや白くするのに半日はかかった。この仕事をしたのは親父や兄貴で辛かったと思う。

このような生活の中で各地に流言飛語が、とび「朝鮮人が反乱を起こしている。見つけたら殺せ！」という事で、各地で自警団が組織されて警戒体制がひかれた。人々の心は動揺し治安は不安定なものになった。もちろん役所、警察、消防も全部倒壊して無くなっており、出勤もできない無政府状態になっていた。翌 2 日には戒厳令がひかれた。6 日目には甲府歩兵第 49 連隊の一部が 派遣されてきたが 11 日には 憲兵隊 15 人と 交代した。矢部の大橋は 地震で損傷が大きく伏見の工兵 第 16 大隊の応援を得て大修理がなされた。関東全体の巨大な地震だから政府からの援助物資なども無くアメリカからの慰問袋が 1 つあっただけ。自給自足、自分のことは自分でやってそれでも不平不満などはなく助け合いで過ごす日々であった。道路を道行く難民は入浴することも無く顔を洗うところも無く目をギョロギョロとした姿は恐怖を物語った。今の戸塚区にあたる地区では死者 31 名、負傷者 259 名、罹災 836 戸、中半壊家屋 517 戸、半壊 203 戸であった。それであっても翌年の箱根大学駅伝は開催され大学生が 50 人位旗を持って不動坂の応援に来た。

地震から 3 日目、 昼頃突然に急をようする半鐘が鳴った。「避難者に混じって朝鮮人が通った」と云うことである。自警団により今の五太夫橋付近手前で 7 名を発見し捕らえたという。道路側にある松の木に電線で縛り付けられていた。私は 3 年生の子どもだった。「朝鮮人は井戸に毒を入れた」などと聞かされていたためか、不思議と「かわいそう」とは思えなかった。この人達はその後殺害され下柏尾の成正寺の山に埋められた。

地震で大切な井戸は埋没して風呂にも入れず身体は錦戸橋の川で洗った。飲

み水はなくバケツで川水を汲み上げ4斗樽にシュロ皮と砂を入れて漉して飲み水に使った。このような生活は1ヶ月程続いた。学校も本校をはじめ南・北両教場とも倒壊し授業の再開は一軒屋の谷戸の林で半年間やった。「ムシロ」を敷き黒板を立ち木に掛けた授業だった。子どもは毎日ムシロを担いで山に登った。



〈親孝行松の図、首洗い井戸と一本杉〉

益田 茂平氏筆



〈達磨絵〉

天翠禅画研究会 主宰 天本 武筆